

コミュニケーションと文化

多文化社会に向けて

上原 麻子

広島大学大学院国際協力研究科・教授

〒739-8529 東広島市鏡山1-5-1

1. はじめに

世界の各大陸からの異なる人種、民族の人々が和気藹々と集う光景はいつ見ても心地よい。とくにその集まりのなかに、国際紛争に巻き込まれ対立しあっている国からの人々が、国家間の軋轢を超えて友人関係を築いている様子を知ると、その感をいっそう強くする。その瞬間には、言葉、国籍、文化的相違など取るに足らぬという考えが頭を過ぎることもある。アフリカ、カラハリ狩猟採集民ブッシュマンの日常行動および会話の分析に優れた研究をする菅原は(1993)、共通感覚という語で、共在する「身体の事実性そのものが万人に保障してしまう普遍的な経験の枠組み」(p.56)の存在に言及する。共に在るということそれ自体が他者理解の前提にあることが指摘されている。より具体的にこのことについて、彼は次のようにも記している。

「...実践的に考えてみれば、現地人のコンテクストを自家菜籠中のものにするということは、本来、果てしのないプロセスである。...同じホモ・サピエンスという同種個体であるかぎり、われわれは否応もなく理解しあってしまうような自明の経験領域を膨大に分かちもっている。例えば、どんなに遠く日本を離れた異文化のなかにあっても、私は笑っている子供を見て「この子は何か悲しいことがあるのだろうか?」とわざわざ考えたりはしない。このあたりまえのことこそがもっとも前提的な主発点であるように私には思える。」(p.54)

言葉の媒介がなくても共に在ることで、他者を

理解し、肯定的な経験を異文化状況で持った人は他にも多いであろう。出会いにおける身体的な表出、行動から人は適切な意味を得ることができる。菅原の指摘は確かである。しかし同時に、彼は異文化的背景をもつ他者を理解するのに言語や当該文化の学習を否定しているのではない。優れた研究者はフィールドに入る前に十分な訓練を受けて準備をし、また、フィールドでも学び続けている。

学際的な研究領域である異文化コミュニケーション論では、異文化において、正確な理解が必要とされる場面でそれができない事例が数多く報告されている。それらには言語能力はもとより、関係性のあり方(Kim et al., 1994; Triandis, 1988他)が違ったり、通常、あまり意識にも上らない些細な文化的行為(Hall, 1959, 1966; Kotchman, 1990; Scollon & Scollon, 1990他)が誤解や断絶の原因になることが記されている。人が話し合うときには、言語・身体(的表現)が分かちがたく統合されて、他者とインタラクションし、両者の動きが出会いの目的のために組織化される。それは、対話者双方が共有するであろうと考える知識に基づいて行われる。そして、共有知識とは、緊密な間柄の者でさえ近似的なものである。そのため相互作用中に理解にいたるには、問い返しやくり返しその他の交渉が要るのである。異文化をもつ者は、一般に、他者との共有知識の足りなさのため、相互作用の過程においてさまざまな失敗をしたり困難に遭遇することが多い。異文化接触が日常的になる今日、異文化をもつ人々との相互作用そのものの研究がこれまで以上に求められている。そこで小

論では対面の発話行動における理解という現象に注目して、次のことを論述する。

- 1) 発話の理解は相互作用を通して行われるが、それは簡単な作業ではない。
- 2) 普通、意識されない微細な行動も文化の影響を受けており、相互作用の結果を否定的なものにする可能性がある。
- 3) また、日常に万国共通のように使用されている概念に、重要な文化的象徴が入り込んでいる場合がある。

これらの目的の論証を、ClarkとMarshall(1981)の言語哲学、Sperber(1981)の象徴表現に関する理論、Lakoff(1987)の認知理論などを用いて試みる。小論は、地球時代の今日、コミュニケーションに文化の影響があることを知る「文化的認識」(cultural awareness)をもつと共に、それだけでは不十分で、客観的でより深い文化理解が求められていることを指摘する。

2. 発話の理解

家族が夕飯の食卓を囲んでいるときに、「私は、今、食べたくない。」と途上国の貧しい家庭の母親が子どもに先に少しでも多く食べさせようとして言うのと、いっそう痩身になるためにダイエット中の日本人の若い女性が同じことを言うのとでは、意味が違う。発話の意味(意図)は、話し手の発話(表出)を聞き手が文脈に参照させて推し量ることによってしか得られない。

この過程を明晰に論証したSperberとWilson(1981)によれば、文脈とは、心理的な構成概念(psychological construct)である。それは、1)記憶の内容と2)物理的環境、そして3)すぐ直前の発話からの情報に大きく依存する。記憶の内容には、聞き手の世界についての想定が大きな部分を占めるが、それには次のような多様な事象が含まれている。「将来に関する期待、科学的仮説、宗教的信仰、逸話的記憶、一般的な文化的想定、話し手の心的状況に関する確信」(Sperber & Wilson, 1981, p.18)である。文脈とは実に大きな概念で、相互作用中の相手の発話を理解するには、支援とも障害要因にもなることが示唆されている。

他者と話しをするということは、話し手が自分の伝えたい意図を言語あるいは非言語表現に託して表出し、聞き手がそれを解釈するのである。話し手はその選択を意識的、無意識的に聞き手がそれを解釈できるように物理的環境と相手の世界を想定して行う。一方、聞き手は受け取った言語あるいは非言語表出を、文脈情報に照らし合わせて話し手の意図を推量し、解釈する。しかし、話し手と聞き手の両者が参照する文脈は、通常、上記の内容からも明らかであるようにずれがある。人は相手の心を透視する能力を持たないので、話しをするということがいかに技術を要することであるかがこの文脈概念からも分かる。

より厳密に、他者と話しをすることの難しさをClarkとMarshall(1981)は、言語学でいう「定指示」(definite reference)という言語の機能に焦点をあてて論証している。定指示の機能をいっそうよく理解するために、彼らが人間には相手の内面を透視する能力がないことを「相互知識」(mutual knowledge)という概念で説明していることを見ておこう。「相互知識」とは、彼らの定義に従えば、「無限大の共通知識と同じ」(“the same as shared knowledge,” p.17)である。話し手と聞き手が同一対象を「相互に知っていることを知っている」という無限の遡行現象を意味し、「相互知識」を共に有することは現実にはありえない。

3. 相互知識のヴァリエーション

それでは人はどの程度の共通知識を有して話しをするのであろうか。それをClarkとMarshall(1981)の「定指示」の機能に関する研究を見ることで検討しよう。「定」とは、「限定定詞(definite determiner)[the, 所有格, this, that, these, those] 名詞」というパターンをもつ名詞句のことである。それが「定的な意味」(definite meaning)を伝える機能をもつのでこのように称せられる。そして、言語表現に現実界の事物や抽象概念を指し示す機能や性質を持つものがあるが、その事物や抽象概念を指示対象(referent)というのに対して、「指示」(reference)とは、それを指し示す機能や性質のことを意味する。(荒木・安井, 1992)例をあげていえば、「定指示」

とは「この花」、「あの麒麟」などという現存あるいは抽象的な事象を、対話の相手に特定させるという言語表現の機能のことである。つまり、話し手と聞き手双方が特定の指示対象 (referent) を共に認知することである。言語表現は、一般に形式の側面と意味の側面を持つが、「定指示」の特徴づけからも、その形式の定性と意味の定性とが依存的事象であることが分かる。

「相互知識」は存在しなくても、対話者同士が精神的に正常で対象に対する注意力も普通にあり、共通言語があれば、「定指示」ができるほどの「相互知識」のヴァリエーションはあるということである。それではClarkとMarshallのいうそのヴァリエーションにはどのようなものがあるのかを見てみよう。

1. 地域社会の成員であること (Community membership)

これはある地域あるいはある集団の成員であれば一定の知識を共有していることを意味する。例えば、教育を受けた日本人なら明治維新は19世紀の中頃 (大政奉還は1867年)、日本国の国会は参議院と衆議院の両院から成る、天皇は日本国憲法で象徴と定められ、国政に関する権能はもたないといった類の地域に関わる知識を持っていることである。坂本竜馬といえば誰であるかが対話者双方で同定できることである⁽¹⁾。

2. 物理的共在 (Physical copresence)

対話者同士が相互知識を持つ最も強い論拠となる状況であるが、以下の下位分類がなされる。

a. 直接的 (Immediate)

現前する対象に対話者双方が注意を払っているときに、一方がその対象に言及することである。例えば、花の飾ってあるテーブルに対面で座っている対話者が共にそれを眺めている時に、片方が「この花」あるいは「その花」などという場合である。

b. 同定可能 (Potential)

対象と対話者の3者が視界の範囲にあるときに、一方が「あの花」などと言及する場合である。

c. 事前の共在 (Prior)

対話者双方が対象をともに見ていたが、話者が「あの花」とそれに言及する前に見ることを止めることを指す。

3. 言語的共在 (Linguistic copresence)

言語は過去、現在、将来の存在あるいは想像上の対象について表現することができるが、それらが対話者の現前にある場合のように直接的に確実に指示させることはできない⁽²⁾。そして、言語的共在にも下位の分類がある。

a. 同定可能 (Potential)

「一本折れてたんで昨日買った花返した。」のように、専門用語では後方照応的 (cataphoric)、すなわち「一本」の意味は後の語句があって「花」と確定できる場合などを指す。

b. 事前の (Prior)

「昨日、花買ったんだけど、一本だけ500円と高かった。」ここでは、「一本」が先に買った花のうちのものである場合のように、先の語句により後の語が何を意味するのかが確定される (前方照応的, anaphoric) ことである。

ClarkとMarshallは、さらに4番目として1と2あるいは1と3の複合された状況を分析するが、指示対象がいつそう間接的になるので、ここでは紙幅の関係上省く。

「定指示」とは聞き手が話し手のいう指示対象を特定の認識する機能であるので、我々がもつ相互知識がどの程度のものであるかを知るに適した概念である。しかし、このリストからも分かるように、相互知識とはそのヴァリエーションですら実に不確かなものである。1は地域の限定が難しく、また、想定される知識を成員全員が同じ確かさで有しているとはいいがたい。そのうえ、地域に関する想定内容は絶えず変化する。2においては、対話中に聞き手が当該の対象を確実に同定していることを話し手が知る程度はaから順に低くなる。そして、3は現前に対象がないために2よりもさらにその確信度は低くなる。対話者が発話を通して対象を互いに同定することは、実に困難な作業であることが分かる。

ClarkとMarshallは文脈という語を使用していな

いが、かれらが言う相互知識のヴァリエーションは、SperberとWilson（1981）のいう文脈概念を会話における言語機能の視点から分析したのものとして考えることもできる。ClarkとMarshallは、発話を通してある対象を対話者が互いに同定していることを理解するには、「共有の」知識（“shared” knowledge, p.57）が必要であり、さらに修正（repair）などの工夫に頼っていると論じる。すなわち、話し手から投げかけられた言葉を、単に聞き手が文脈に参照させるだけでは、普通、発話の意図の理解はなかなかできないのである。話し手の言いなおし、確認、聞き手からの問い返しなどの会話の工夫（device）があって意味が生じることが言われている。

Moerman（1988）は、タイのPhayao県Chiangkham地区の一農村で会話分析のためのフィールド・ワークをし、ClarkとMarshallの論点を実証している。彼によれば、会話における理解とは、「交渉され、進行するもので、予期されるとともに過去に遡るものであり、取り消しができ、かつ結果として生じる重大なものである」（Moerman, 1988; p.45）。対面のやりとりにおける意味の理解は、社会的に組織化されて達成される現象であることが言われている。それはやりとりの形式と内容が相互作用の状況にあって交渉されてさまざまに変化する中から生まれるのである。（Moerman & Sacks, 1988）

会話の理解は、相手の世界に対する想定を想定することに大きく依るといって危うさで成り立っている。このため、世界に対し近似的な想定を持つ者ほど誤解が少ないことは言うまでもない。異文化コミュニケーションの理解には、発話の構成のされ方までを含めた言語・身体的表現および文化的想定の学習が必要である。しかし、そうした知識は相手の文化的想定の理解に役立つが、現実に対面で行なわれる発話の意味の同定には支援であるにすぎない。会話の意味は相互作用の中から創出されるので、事前に出会いの場面を想定して、十全な会話のスク립トを準備することはできない。MoermanとSacksが言うことを具体的に次の異文化における事例で見てみよう。

4．文化的認識

以下の2例は、出会いの相手呼びかける呼称（address term）の選択が課題である。両例とも発話には文化の影響があることを認識し、また、自民族中心にならないように努める話者が関わっている。それにもかかわらず、異文化状況で対話の流れが否定的に展開する。

第1の事例は、日本人のX教授がインドの大学のその分野では高名なY教授を訪問した時の出会いからである。初対面であったので、X教授はY教授を“Professor Y”と呼んで話しを始めた。それは米国のような「平等」な関係を志向する社会でもこうした場面ではよく見られる礼儀正しい呼称の選択である。また、Xが旅行前に地域の専門家からインド人の中には例えば出身大学、所属、業績などと人を何らかの基準を用いて上下の評価をする人が多いと聞いていたため、なおさら礼儀正しい振る舞いであった。しかし、対話が始まりXが“Professor Y”と言う度にYは自分のファーストネームを、それを使ってくれと言うように差し挟む。Xもそうした場面は他の異文化状況でも何度か経験しており、ファーストネームを使用したほうがいいかと解釈したが、専門家の助言もあったのでしばらくそうせずに話しを続けた。しかし、Yのファーストネームが繰り返されたある時点で、Xは自分の解釈は間違っていないと判断し、ファーストネーム使用に切り替えた。異文化では少しごちなくとも相手の要望が可能であればその行動をしたほうがよいと考えてのことである。Xの判断に間違いがなく、出会いはファーストネーム・ファーストネームの関係で順調に進むかのようであった。しかし、議論が深まってある国際問題に対し互いが見解を述べ合ったときから、Yの態度は変化した。その後YはXとファーストネームで呼び合う関係を受け入れなかった。

次は東京から香港への飛行機の中で交わされた中国人と米国人のビジネスマンの対話である（Scollon & Scollon 1995, p.122）。偶然であるが機中の出会いで二人は中国人の会社が、その米国人が香港で購買を予定する商品を販売していることを知る。なお、小論で今後取り上げる事例はもとも英語で話されたものであるため、先に英文を

提示し、そして括弧内に日本語の訳文を記す。

Mr. Richardson: By the way, I'm Andrew Richardson. My friends call me Andy. This is my card.

(リチャードソン氏: ところで、私はアンドリュー・リチャードソンと申します。友達はこのことをアンディと呼びます。これが私の名刺です。)

Mr. Chu: I'm David Chu. Pleased to meet you, Mr. Richardson. This is my Card.

(チュー氏: 私はディビット・チューです。お目にかかれてうれしいです、リチャードソンさん。これが私の名刺です。)

Mr. Richardson: No, no. Call me Andy. I think we'll be doing a lot of business together.

(リチャードソン氏: いや、いや。アンディと呼んで。我々はいっしょに多くのビジネスをやるだろうと思えますよ。)

Mr. Chu: Yes, I hope so.

(チュー氏: いや、そう願います。)

Mr. Richardson (reading Mr. Chu's card):

"Chu, Hon-fai," Hon-fai, I'll give you a call tomorrow as soon as I get settled at my hotel.

(リチャードソン氏(チュー氏の名刺を見ながら): 「チュウ・ホンハイ」、ホンハイ、私は明日ホテルに落ち着き次第君に電話をするよ。)

Mr. Chu(smiling): Yes. I'll expect your call.

(チュー氏(笑って): お待ちしてます。)

Richardson氏は文化の多様性を理解しようとする現代の米国人である。彼の会話の流れは「平等」の関係を志向する米国人をよく表していると同時に、中国人に西洋文化を押し付けないように「David」というChu氏の英語での通称をわざわざ

避けている。Richardson氏にとってはAndy-Hon-faiが呼ばれるにも呼ぶにも最も自然で快適なやり方である。一方、Chu氏はDavidならともかく、Hon-faiとは仕事の関係では呼ばれたことがないので、「距離のある平等」、つまりラストネームで呼び合うのが最も心理的に落ち着くと内心それを希望している。また、Richardson氏が読めたかどうか不明であるが、Chu氏は彼のちょっとした困惑を微笑みで表している。

いずれの事例にも礼儀正しく文化的に感受性豊か(cultural sensitivity)でありたいと心がける人たちが登場する。この意味でX教授もRichardson氏も異文化を持つ人との会話には文化的影響があるという認識を、表面的ではあっても持つ人々である。そして、どちらのやりとりでも、片方が直接的であれ間接的であれ、自分がどう呼ばれたいか希望を表明し、最初の事例では一時的な合意もあった。しかし、両事例とも対話の流れの中で最終的な合意には至らない。

呼称は文化により使用方法が異なるが、研究も進んでおりかなりの予測ができる。しかし、それでも事前にシナリオを準備することはできない。インドの大学の先生たちは初対面の外国人とは肩書きを付けて、中国人ビジネスマンは姓で呼び合っただけで対応する人が多いかもしれない。しかし、香港の中国人の中には同様な場面で「Call me David.」と対応する人がいるかもしれないし、さらに、両国には呼称を気にしない人がいるかもしれない。文化的相違と個人差があり、それらが相互作用の状況の中で交渉されるのである。どんな会話の小片も、社会的に組織化される中で意味を帯びる。

次節では、話すという現象について、一見、意識に上るかのぼらないかのレベルにまで文化の影響があることを見よう。

5. 異文化コミュニケーションにおける誤解

異文化状況における会話分析のパイオニアのひとりであるGumperz(1982)は、文化的背景を異にする者の相互作用には、発話を作り出すことと解釈の両面に多層的に文化的慣習(cultural convention)の影響があると述べる。具体的に、彼の

言う発話における多層的な文化の影響とは次のレベルにまで及ぶ (Gumperz 1982, p.186) .

1. すべての解釈の基礎となる抽象的な(会話の) 文化的論理 (logic) から, 1 回分の話しにスピーチを区分することまで
2. 意味的に関連のある諸行為と解釈の枠組みにカテゴリー化することから, 統語的つながりにする韻律の分布および単語と文法を選択可能なものの中から選ぶことまで

Gumperzに従えば, 文や句や語だけでなく段落の順序, 要点の表出箇所, 語彙の選択, 抑揚のつけ方, ほんの僅かな声量 (breathy), 話しの速度, 同時発話の箇所とその頻度までもが文化的慣習に基づくことが多いのである。つまり, 相互作用中には, 分節化された発話だけでなく, 話しの要点をどの時点で提示するか, また, あいづちになるかならないかの僅かな発声, 声量の多寡, 一瞥, 沈黙すらが解釈の対象にされて意味を持つことが言及されている。実に人間はどのように微細な行動の差異も解釈の対象にする。そうした文化的影響を受けた発話の構造と内容が分からなければ, 相互作用における他者理解はできないことが言われている。さらに重要なことは, 相互作用中にそうした解釈の対象を誤って使用すると, 道徳的な判断が下されることがあることである。

以下にそうした会話の小片やマイナーなことと考えられている, あいづち, 話しの結合性 (cohesiveness) が係わる相互作用の事例を取り上げて, 異文化状況における誤解が重大な結果になる可能性があることを提示する。次節ではまた, 今日, 多くの文化で共通のように使われている語を例として取り上げ, その概念が内包する文化的意味および異文化状況において使用される場合のその概念の意味的ずれについても見る。

事例 1 あいづち

最初は, 合衆国で企業機密買収の犯罪者として告訴までされた日本企業の日本人技術者と米国企業の代表者を装うFBI捜査官のテープに録音された会話の一部についてである。引用には前者を engineer の略で “Engr”, 後者を “Agent” で示す。

Agent: You see, these plans are very hard to get.
(捜査官: 知ってるだろ。こうした計画はとて

つもなくやるのが難しいこと。)

Engr: Uh-huh.

(技術者: うん。)

Agent: I'd need to get them at night.)

(捜査官: 夜陰に乗じてやる必要がある。)

Engr: Uh-huh.

(技術者: うん。)

Agent: It's not done easily.

(捜査官: 簡単にやれない。)

Engr: Uh-huh.

(技術者: うん。)

Agent: Understand?

(捜査官: 分かるかい。)

Engr: Uh-huh.

(技術者: うん。)

Shuy, (1993), p.8より

この事件に関して検察側が起訴を行った理由は, テープの会話を分析し, 日本人技術者が「このような計画を実行することが不法である」と FBI捜査官が言ったことを理解していたとしてである。検察側の主張の根拠は日本人技術者の繰り返される “Uh-huh” である。会話の一方略であるあいづちは, 日本人も米国人も使用する。ときには “Uh-huh” のかわりに “Yeah”, またはうなずきという非言語表現, あるいはうなずきと言語表現が同時に用いられることがある。そして, あいづちの機能は次のように複数にある (Maynard, 1997, p.142) .

1. 聞き手が話し手に話しの継続を促す合図
2. 発話の内容を理解した合図
3. 話し手の判断を感情を込めて支持する表出
4. 同意を表すこと
5. 感情的な強い反応
6. 情報に対するマイナーな追加, 修正, あるいは要求

しかし, 日本人と米国人のあいづちの使用法は異なる。最も異なる点は日本人の方が使用頻度が高いことと, 挿入場所が違うことである。米国人は一般に発話の終了時に, そして日本人は発話の最中でも英語では不適切と感じられる箇所にも挿入する傾向がある。相手の話しに注意を払って聴いていますということを伝える方法が両国で違うのである。合衆国では相手の話しを聞く時は沈黙

が、日本では絶えず言語・非言語で合図を送るのが礼儀正しい振る舞いである。

さらに異なる点は、日本人のあいづちはあなたの話しを注意して聞いていて、これまでのところ発話の表意は分かりましたという単なるフィードバックの合図であることが多いことである。しかし、この事例で日本人技術者に不利に働いた要因である“Uh-huh”は、それが相手への理解、同意と解釈されたことである。この技術者は英語で話しを進めながら、認知環境が日本文化の影響のままであったのである。異文化相互作用に対し認識が高く弁護士であるShuyは、この事例についてまだ言語表現に関しても誤解があった可能性があることを指摘している。それは多くの米国人ならこのような状況における“get them at night”を「不法」と難なく解釈したかもしれないが、日本人が同じ理解をしたかどうかは不明であるという点である。

事例2 会話のロジック

以下は、香港の中国人ビジネスマンと合衆国ビジネスマンが同じことを会議で語る場面で、談話の構成法の違いが表出されている。研究者によっては、談話の結合性の相違と言われることもあるが、異文化コミュニケーションの誤解が生じるとは捉えられにくい事例のひとつである。

1. Because most of our production is done in China now, and uh, it's not really certain how the government will react in the run-up to 1997, and since I think a certain amount of caution in committing to TV advertisement is necessary because of the expense. So, I suggest that we delay making our decision until after Legco makes its decision.

(われわれの生産のほとんどが、今や中国でなされていて、そして、えー、政府が操業にー1997年まで、どんな反応をしてくるか本当に確かでないの、そして、テレビ広告をするには経費がかかるため、ある種の注意が必要と考えますから。だから、私はわれわれの決定はレグコが意志決定するまで延期するよう提案します。)

2. I suggest that we delay making our decision

until after Legco makes its decision. That's because I think a certain amount of caution in committing to TV advertisement is necessary because of the expense. In addition to that, most of our production is done in China now, it's not really certain how the government will react in the run-up to 1997.

(私はわれわれの決定はレグコが意志決定するまで延期するよう提案します。それはなぜかという、テレビ広告をするには経費がかかるためある種の注意が必要と考えますので。それに加えて、われわれの生産のほとんどが、今や中国でなされていて、そして、政府が操業にー1997年まで、どんな反応をしてくるか本当に確かでないから。)

Scollon & Scollon, (1995), pp.1-2より

どちらが中国人でどちらが米国人の談話か、英語使用の経験の多い読者にはすでに明らかであろう。1の中国人の談話は帰納的、2の米国人のは演繹的に構成されている⁽³⁾。帰納的パターンの方はこれから指摘しようとすることに対する理由や個人的な意見が先に述べられて、要点が最後に来る。それに対して演繹的パターンでは、まず要点が述べられ、それについての理由、意見が後に続く。どの文化でもどちらのパターンも使用されているが、公けの場では米国では2の方が頻繁に使用される傾向がある。

Scollonら(1995)は2つのパターンの違いを、BrownとLevinson(1978)のいう丁寧さの方略から分析している。BrownとLevinsonの理論については、ここではごく簡単にそれがGoffman(1967)の“facework”の理論を応用していること、そして、丁寧さの方略、つまり押し付けがましさを程度の調節は、一般に話し手と聞き手の社会的距離および力関係で決まり、文化的に異なると分析していると記すにとどめる。Scollonらによれば、帰納的パターンの方が相手の受け入れ方を見て要点を提出するので、対話の相手と距離をおき丁寧であるのに対し、演繹的パターンは飾りのない単刀直入さで、相手と対等あるいは力関係で上に立つ状況での対応に使用される。前者は上下関係の

ある社会で、後者は平等志向の社会で用いられることが多い。

さらにもうひとつの両パターンの相違は、要点にいたるまでの時間である。今日のような速いテンポでものごとが進む脱工業化社会では、話し手が聞き手に自分の頭脳の明晰さを伝達するには演繹的パターンが最適の方略である。このパターンは、とくに米国のビジネス界だけでなく、今日一般に米国や日本の科学、教育の世界でも理想とされる傾向がある。そうすると、帰納的パターンの話し手は、聞き手が演繹的な談話構成をする傾向のある文化的背景を持つ人から明晰さに劣ると判断される可能性をはらむ。

事例3 「グローバル」な概念

地球化時代の今日、文化の境界を越えて共通語とも言われる言葉が普及しつつある。しかし、言葉に備わる表示義 (denotation) と共示義 (connotation) は、そのように広域で使用される人々に共有されているだろうか。次は、合衆国に留学中の日本人学生と現地の学生との短い会話である。

US student: I love Sunday morning!

(米国人学生: 日曜日の朝が大好きなんだ!)

JPN student: Me, too!

(日本人学生: わたしも!)

異文化の人と共感を覚える会話をするのはなかなか難しいことなので、このやりとりの後日本人学生は、少し幸せな気分になった。しかし、この会話が成功したかどうかは、コミュニケーションの成功がなんであるかの定義によって違ってくる。もし、それが共感を覚える会話をする事なら成功かもしれないが、通常それと解されている話者の意図の理解なら誤解になるかもしれない。

日本人にとって日曜日は1872年(明治5年)にグレゴリウス暦を採用して以来、官公庁、学校、企業で休日となる週の第1日目である。仕事を忘れてのんびりできる日である。それに対して、西洋キリスト教圏の人々にとって日曜日は週の第1日目で休日という同じ意味もあるが、キリスト教の長い歴史によって、キリストの復活を記念し礼拝すると定められた「主の日」(the Lord's Day)でもある。16世紀の宗教改革以降は、もともと週の第7日目(土曜日)であったモーセ(紀元前13

世紀のユダヤの建国者、立法者、予言者)の十戒に定められている安息日(Sabbath)が第1日目(日曜日)に変更されたのでその意味も兼ねる。そして、安息日の由来をたどれば『聖書』の「創世記」にまで遡る。モーセがシナイ山の頂で神から与えられた十戒の中に次の言葉がある。

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日の間働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日はあなたの神、主の安息であるから、何のわざをもしてはならない。…主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。」(日本聖書協会, 1957, p.102)

今日、宗教に無関心な人々が増えていると言われても、西洋におけるキリスト教の人々の意識、生活に対するその文化的な影響は計り知れない。カトリック教徒や厳格なカルヴィン派プロテスタントの多いヨーロッパの地方では、近年でも日曜日には隣人に迷惑をかけない程度の趣味以外の屋外での仕事をしてはいけない。家の中で静かに過ごすことを心がけねばならないのである。この教会の掟は地方の村落や小都市で現在でも効力を持っていると言われる。大都會では、日曜日本来の意味が失われていることが多いが、それでも極力静かにすることが要求されているので、商店やデパートが閉まっているのである⁽⁴⁾。合衆国の大都會においても、この状況は大きくは変わらない。

ここでは日本人学生がキリスト教徒でないとしての事例であるが⁽⁵⁾、たとえ 米国学生が熱心なキリスト教徒でなくても、ふたりの学生の発話の意味は同じでない。

発話行動に現れる文化の影響を見てきたが、1, 2の事例から、それはいわゆる分節化された文化的な象徴表現だけでなく、ほんのわずかな言葉になるかならないかの声量、うなずき、説得のためのロジックにまで及ぶことが明らかになった。他にも話しの速度、抑揚、間合い(pause)、沈黙等々、異文化コミュニケーション研究においては、民族誌学的な記述、定量法よるデータの提示とさまざまな方法論によって、そうした微細な行動上の差異が文化的意味を持つことが実証されてきている。それらは文化的慣習であり、また多くが無

意識に使用されているため、異文化相互作用において、自文化の慣習に基づいて解釈し判断が瞬間的に下される傾向にある。意識に上らない微細な行為で俊敏・明晰さに欠けるや僭越・軽慮のレッテルを貼られることもあるのである。差異が意味を帯びるのは出会い毎の相互作用の過程のなかであり、すべてが重大な結果を生むとは限らない。しかし、こうした微細な行為にもとづく否定的な出会いの結果は、双方にその理由が不明瞭のままに終わることが多い。

6. 象徴表現について

事例3について、少し深い検討をするために、Sperber (1981) の象徴表現に関する理論を見てみよう。最初に彼の人間の知識に対する次の3分類をみて、象徴表現が人のどのような知識であるのかを明らかにする。

1. カテゴリーを対象にする意味論的知識

使用された語の意味から真偽の導出ができ、世界に係わらない分析命題の集合としての知識を指す。世界に関わらないとは、人間の作り出したすべての社会の状態に関係なく、言及された言葉の意味だけから真偽が分かる知識である。例を以下にあげる。

- a) ライオンは動物である。
- b) よいナイフはよく切れるナイフである。
- c) 独身者は結婚していない。

2. 百科全書の知識

世界に係わる総合命題の集合という形であらわされる知識。すなわち、どんな意味論的規則によってもそれぞれの真偽を決めることができず、それは世界の状態に応じて決定される知識である。例は、

- d) ライオンは獰猛な動物である。
- e) よいナイフは高価である。
- f) 源頼朝は北条政子の夫である。

厳密に言えば、Sperber (1981, p.150) 自身も言及しているが、1と2の境界設定は困難である。これについては後に触れるので、ここでは明確な境界は不明であるが、1と2の知識が存在することが重要であるとするSperberに従おう。

3. 象徴的知識

2と同様分析的でなく、その真偽を使われた語の意味から導出できず、しかも百科全書の知識で言いあらわすこともできない総合命題の集合としての知識である。2との相違は、3には真偽を決める経験的基準が存在しない点にある。この知識に関する例を次に記すが、それらはSperberがフィールドワークをした南エチオピアのドルゼ族にとっての信条を表している。

g) 豹はキリスト教を信じる動物であって、コプト教会の断食を遵守する。

h) 蛇を殺すのはタブーである。

Sperberによれば、象徴的知識は「[p]は真である」という引用符に入れられた形の命題でしか百科全書に現れない。その理由は、例えばドルゼ族の人々がg)とh)にかんする自らの命題を正当化するための経験的証拠が架空であることによる。Sperberは、この形で百科全書に現れる概念的表現pを信念と呼ぶ。彼によればまた、格言、諺、隠喩、寓喩といった文彩である表象も同様に「[p]は真である」という形をした命題として百科全書に現れる。信念と文彩はともにそれぞれの概念的表象自体で字義通りに分析されえないし、百科全書の知識と突き合わせて経験的基準でもって真偽を知ることもしかない。gとhは引用符に入れられてドルゼ族の信念であると、そして、「転石苔を生ぜず」は単なる諺として百科全書に現れるのである。

しかし、信念と文彩の違いは、文彩はその含意の同定が相互作用中に他者の解釈に任せられるのに対し、信念は、通常、当該文化の人々にとっては真なる百科全書の命題として与えられているところにある。すなわち、ドルゼ族の人々には、普通、gとhの引用符は意識されることがない。そのため、文彩は象徴性が表立っているのに対し、信念は当該文化の人々にとっては無意識的に象徴性を帯びているに過ぎない (Sperber, pp.160-171)。

事例3の「日曜日朝」という表象に戻ろう。それは、Sperberの分類に従うと、一般に、日本人にとってこれは百科全書の知識に属する。しかし、西洋キリスト教圏の人々にとってこの表象は百科全書の知識であると同時に象徴的知識でもある。表層にある前者の知識に加えて、後者がいま

だに西洋キリスト教圏の人々の意識的、無意識的な世界で根強く生きている。むしろ後者の意味合いのほうが強いといえるかもしれない。「週の初めの日の朝早く、イエスはよみがえって、まずマグダラのマリアにご自身をあらわされた。」⁽⁶⁾という復活や「こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第七日にその作業を終えられた。」⁽⁷⁾という天地創造は、架空であろう表象や神話とは言えないほど、宗教離れをしつつあるキリスト教圏の若者の無意識のレベルにまでも内面化されている。それらは、とくに熱心なキリスト教徒でない若者だけでなく、宗教に懐疑的な知識人にとってすら、一笑に付せない物語なのである。それらの象徴表現は、現代の西洋キリスト教圏の多くの人々には、引用符が見えているかもしれない。しかし、クリニックを銃撃してまでも中絶に反対しようとする人々からDNAに関する研究や生命倫理問題を静かに考える知識人の思考の根底にも「神は自分のかたちに人を創造された」⁽⁸⁾神話が脈々と生きている。

7. 認知の仕組み

Sperberの象徴表現に関する理論の中心は、比喩や信念のような、使用されている語の意味論的な解読も経験から帰納することもできない象徴的表現ですら、引用符に入れてまで解釈の対象にする、人間のそのしたたかな認知の仕組みを明らかにしようとするところにある。彼によれば、その仕組みには、概念装置と象徴装置という二つの装置が組み込まれている。今、ある情報が入力されたとすると、人はまず概念装置でその概念的表象の有意性を既にある百科全書的知識を総動員して確認しようとする。そこでの有意性の確認が失敗に終わってもめげずに、新しい情報が創造されたことは確かであるので、次に象徴装置において解釈を試みる。そこでは注意を置き換えて新たに焦点を合わせ、記憶を呼び起こして探索し、創造された概念的表象の点検と吟味を行うのである。

隠喩に関する優れた分析をSperberの理論を用いて行った菅野(1986)は、この吟味の過程について次のように言及する。「(そこでは)あらかじめ存在する類似をなぞるのではなく、むしろ新た

な思いがけない類似を発見する、いや発明する……」(p.110)と記している。象徴表現の解釈は、それが概念の意味論的または百科全書的知識からはずれて相対的に自由に、想像力を伴ってでもなされるのである。象徴表現の本質は意味付与であり、それは文化ごとに相対的に自由に人々の創造力でもって行われる。Sperberの分類した知識のすべてが文化的産物といえるが、うち象徴表現のみが言葉の意味作用による分析も経験的証拠も受け付けず、真偽の世界から離れて、想像力・創造力を駆使して解釈が行なわれるのである。異文化における象徴表現の理解の難しさがここにある。

前述の「カテゴリーを対象にする意味論的知識」と「百科全書的知識」の境界の不確かさに戻ろう。そのためにLakoff(1987)の論じる“mother”という概念カテゴリーを例として見る。Sperberの知識分類に従えば、“mother”は「子どもを産んだ女性」で意味論的知識にはいるかもしれないが、Lakoff(1987 p.74)によると、以下のモデルが示すような多様な事例の全範囲を網羅する母の定義はない。

出産モデル：出産する人がmotherである。

遺伝モデル：遺伝物質を寄与する女性がmotherである。

養育モデル：子どもを育て育む女性がその子どものmotherである。

結婚モデル：父親の妻がmotherである。

家系モデル：最も近い女性の先祖がmotherである。

中心的な場合、つまりすべてのモデルが合致する場合には、「現在はもちろん、生れてこのかた女性であり、子供を産み、子供の遺伝子のうち半分を自分が与え、子供を養育し、父親と結婚して、子供より一世代上であり、子供の法律上の保護者である母親が含まれる。」(Lakoff p.83)のようになる。しかし、次のmotherはすべて今日の技術的な先進国における日常会話に登場するが、それらを含めた母の定義はない。Stepmother(継母), adoptive mother(養母), birth mother(生母), foster mother(里子の母), biological mother(生物学上の母), surrogate mother(代理母), unwed mother(未婚の母), genetic mother(遺伝上の母)。

こうしてみると，“mother”は世界に関わる概念でもある。そして，Lakoffのあげる“mother”の例だけからも明らかであるが，母親の種類は全ての文化で共通ではない。Sperberのいう1と2の知識の境界が不明な場合があることと同時に，いずれの知識にも文化の影響があることが分かる。たったひとつの日常的な概念にも，当該文化の人々の世界観，宇宙観が込められている場合があることを見た。それは，広域にわたる異文化で，共通にまた日常的に使用される語句にも概念的に異なる場合があることが意味されている。

Lakoff (1987) およびLakoffとJohnson (1981) は，人間の持つ概念の大部分は隠喩的 (metaphorical) でかつ身体的な経験にもとづいて構成されていると論述する。そうした隠喩的，経験的な概念体系によって我々は経験を構造化し意味付けているのである。同じ主題に関して文化毎に異なる隠喩が存在し，文化毎に人々の経験の多くの部分が異なる。そして，文化を同じくする人々の間でも，信念や隠喩的理解には想像力が必要であることが菅野によって指摘された。発話の理解は，表意を文脈に照らし合わせて推論することによってしか得られない。人間の経験に対する文化の影響は限りなく深く，異文化における他者の世界に対する想定を想定することは，容易ではない。

8. おわりに

人間がヒトとして同種であり，共有知識を持つことを否定する者でない。しかし，同時に人間は文化の産物でもあり，その影響が計り知れないことも事実である。小論は，文化が人間の無意識と思えるレベルにまで影響を及ぼしており，発話の理解は，とくに異文化状況においては，簡単でないことを見てきた。発話の理解は，相互作用中に話が社会的に組織される中で生れること，そして，発話の構成法や内容は言うまでもなく，たった一言の象徴概念や微細な行動にも文化の多大な影響があり，それらの文化的意味の認識なくして発話を正確に理解できないことを検討した。

しかし，今日の我々の会話は，その多くが実務的な当座の目的を遂行することに費やされてい

る。会話の多くは，文化理解という短時日には不可能でまた到達点に至ることのない目的に充てられてはいない。「日曜日には出張から戻りますから，その仕事は月曜に話し合しましょう。」「クリスマス休暇なので，ニューヨークから為替相場の報告はありません。」など，文化理解はあたかも不要であるかのような会話が行き交う。ドルゼ族など民族名すら頭の片隅にもなくても，また，クリスマスはもちろん，ラマダンやハヌカ (ユダヤ教の「宮清めの祭」)，ディワリー (ヒンズー教の「灯明の祭り」) などの深い文化的意味は知らなくても日常生活に何の差し障りもない。そしてまた，コミュニケーションのシステムは変容に対し大変柔軟であるので，完全に文化的慣習に則って形式を整えたものでなくても，多少の欠陥は大目に見て処理ができ，当面の目的遂行ができる。

しかし，人間の意識，行動，生活の隅々にまで浸透した文化的影響は，異文化を持つ相互作用者を予期せぬ場面で困惑に陥れることがある。コミュニケーションは経験の共有が多いほど容易であるので，その相互作用が文化的慣習の齟齬により，円滑に機能しなくなることがある。原因となったその齟齬の一端も表層に浮かんでくずに，困惑のまま出会いが終了することもあるのである。

大村 (1985) は，ゴッフマンが現代社会の連帯様式として分析の対象とした「集まり」(gathering)，「遭遇」(encounter)，「社会的機会」(social occasion) を研究し，異人種・異民族が共生する多文化社会の建設に示唆的な論述をする。彼によれば，現代のそうした集団は地縁や血縁に拘束される共同体でもなく，階級的な特殊利害に拘束される組織でもない「有機的連帯」を可能にする。「有機的連帯」とはそうした出会いにおけるストレンジャーの間の相互依存関係を抽象した概念である。大村は，そうした「有機的連帯」を実現させる根底にゴッフマンが研究対象にした集団における人々の「機械的連帯」があると言う。ここで言われる「機械的連帯」とは，類似者間のその類似による感情融合を抽象した概念を意味する (大村, 1985, p.10)。それは，われわれは共に人間であるという類似性以外，何ものをも共有しない認識の上に成立し，成員を限定しない集団である。その意味でそうした集団は覚束ないが異文化をも

つ他者に対し開かれている。

そして、そうした集団、つまり「ストレンジャーでしかないような人々の群れ、あるいは特殊利害の(集団)エゴイズムの巷」(大村, 1985, p.11)を一個の道徳的社會にできるのは、外部から人々に押し付けられたモラル・ルール、すなわちゴッフマンのいう各社会的集まりの儀礼体系(ritual organization of social encounters)にほかならない。大村の分析の焦点は、ゴッフマンがいう現代社會の集まりの各状況にあつて、当座の儀礼を巧みに演じようとする参加者のダブル・ライファー「ふりを演じる私」とそれを「観察する私」である。ふりを演じる私には、もちろん、「モラル・ルール」を共有する協力的な観客が必要である。

確かに異文化的背景をもつ者たちの出会いは、「人類」という類似性を基礎にした「機械的連帯」となり、それを基に大村の言う「有機的連帯」を創り出す契機となる可能性を持つ。しかし、さまざまな異文化状況においては、個々人はいまだ「モラル・ルールを共有する観客」を有しなく、その場の状況に適切な「私」自身さえ演じきれないのが現状である。異文化状況における日常生活にまで共有できる「モラル・ルール」が構成されるために、文化的な発話・行動様式および異文化相互作用の研究がいっそう進められるべきである。同時に、そうしたルールの構成に、認識しておくべきことは、社会的出会いの多くに力関係が反映することである。異文化状況ではあいづちの多少は、相互作用者の双方に不快感を与え、帰納的、演繹的な談話構成法は、話者の双方に論点の置き方がおかしいという印象を残すかもしれない。にもかかわらず、解釈に続く判断の比重は力関係で決まる。同じ文化においても異文化状況においてもこのことは変わらない。発話の理解は相互作用の中で社会的に交渉され、進行し、重大な結果をもたらすことがある。

各文化に特徴的なコミュニケーション・パターン、さまざまな状況における規範的な礼儀と共に、神話、宗教、言語、芸術、歴史、科学を学び、文化の核心、すなわち象徴表現の理解に努めるべきである。相手の視点からの発話理解が可能になることは、いっそう平等な関係を基に構築される多文化社會の前提である。

注記

- (1) 固有名詞なら必ず同定できるというわけではないのは、次の例が示す通りである。The Peter next door. (隣のピーター)の固有名詞は普通名詞としての用法をもつ。
- (2) 例をあげれば、“Yesterday I bought a book.” とか何かある本(a book)について言及する前に、“the book”や“that book”のような定指示語を突然に対話に持ち出すわけにはいかないことである。
- (3) このコミュニケーション・パターンの違いは、異文化コミュニケーション論のパイオニアであるW. Howellによって、1970年代より帰納的発話を「感性的」、演繹的発話を「分析的」パターンとも称されている。国際ビジネスのR. Lewis (1996, pp.288-289)は、思考法の相違とも指摘している。
- (4) 小島、ルー・クリステル(1996)異文化理解教材『異文化を知ろう』国際化のための教材作成研究会(代表、上原麻子)、(財)ひろしま国際センター、p.28による。
- (5) 筆者は米国で、ある日本人学生が自分は日本でキリスト教系の大学に通っていたというのを聞いた米国人の大学教授が、親の代からなら別であるがその程度ではキリスト教を内面化しているとは言えないと述べたのを聞いたことがある。
- (6) 日本聖書協会、1957、『聖書』「マルコによる福音書」第16章、p.81より。
- (7) 同上、「創世紀」第2章、p.2より。
- (8) 同上、「創世紀」第1章 p.2より。

参考文献

- 荒木一雄・安井稔(編)(1992),『現代英文法辞典』三省堂.
- Brown, P. & Levinson, S. (1978), “Universals in language usage: Politeness phenomena.” In E. Goody (ed.) *Questions and politeness*. Cambridge University Press, 65-67.
- Carbaugh, D. (1990), *Cultural Communication and Intercultural Contact*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum

Associates, Pub.

カッシーラ, E. (1965), 『人間』 岩波書店.

Clark, H., and Marshall, C. (1981), Definite reference and mutual knowledge, A. K. Joshi eds., *Elements of Discourse Understanding*. Cambridge University Press, 10-63.

Goffman, E., (1967), *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. Chicago: Aldine Publishing Co.

Gumperz, J. (1982), *Discourse Strategies*, Cambridge: Cambridge University Press.

Hall, E. T. (1959), *The Silent Language*. Westport, Connecticut: Greenwood Press, Pub.

Hall, E. T. (1966), *The Hidden Dimension*. New York: Anchor Books.

(財)ひろしま国際センター (1996), 異文化理解教材 『異文化を知ろう』 国際化のための教材作成研究会 (代表, 上原麻子).

Kim, Uichol et al., (1994), *Individualism and Collectivism: Theory, Method, and Applications*, Thousand Oaks: SAGE Pub.

Lakoff, G. (1987), *Women, Fire, and Dangerous Things*, Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, G., and Johnson, M. (1980), *Metaphor We Live By*, Chicago: The University of Chicago Press.

Lewis, R. (1998), *When Culture Collide: Managing successfully across cultures*, London: Nicholas Brealey Publishing.

Maynard, S. (1997), *Japanese Communication: Language and Thought in Context*. Honolulu: University of Hawaii Press.

日本聖書協会 (1957), 『聖書』.

大村英昭 (1985), ゴッフマンにおける ダブル・ライフ のテーマー演技 = 儀礼論の意義 『現代社会学』 19, 5-29 .

Scollon, R., and Scollon, S. (1995), *Intercultural Communication: A Discourse Approach*, Oxford: Blackwell.

スベルベル, ダン, (1981), 『象徴表現とは何か - 一般象徴表現論の試み』, 紀伊国屋書店 .

Sperber, D., and Wilson, D. (1995), *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.

Shuy, R. (1993), *Language Crimes: The Use and Abuse of Language Evidence in the Courtroom*, Oxford:

Blackwell.

菅原和孝 (1998), 『身体的人类学 カラハリ狩猟採集民グイの日常行動』 河出書房新社 .

菅野盾樹 (1986), 『メタファーの記号論』, 勁草書房 .

Triandis, H. et al., (1988), *Individualism and Collectivism: Cross-Cultural Perspectives on Self-Group Relationships*. Jr. of Personality and Social Psychology, 54, 323-338.

上原麻子 (2001), コミュニケーション現象の解明に向けてーコード・モデルからGoffmanへ 『異文化コミュニケーション研究』 13, 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所, 31-57.

Abstract**Communication and Culture: from a Perspective of Building a Sound Multicultural Society**

Asako UEHARA

Professor of IDEC

Graduate School of International Development and Cooperation (IDEC)

1-5-1, Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, Hiroshima, 739-8529, Japan

E-mail: auehara@hiroshima-u.ac.jp

This article provides a brief theoretical analysis on the process by which humans understand one another in a face-to-face interactions, and the deep cultural influence this process has upon human behavior and cognition.

For the former purpose, the author applies the function of the “definite reference” discussed by Clark and Marshall (1981) in relation to the concept of the “mutual knowledge.” For the latter aim, she analyzes several critical items in constructing conversation in intercultural settings (e.g., back channeling, cohesiveness, culture-bound symbolic words and expressions). The theoretical frameworks utilized include Gumperz’ (1982) investigation concerning affections of socio-cultural conventions on different levels of speech production and interpretation, Sperber’s (1981) explication on symbolic expressions, and Lakoff’s (1987) notions concerning the principles of cognitive science.

In order to grasp the other’s intention in intercultural interaction, the author insists that the so-called “cultural awareness” is insufficient. Yet, an objective and profound understanding the other’s culture, as well as one’s own, is indispensable. The author maintains that these understandings can become the basis on which a sound multicultural society is built.